

## 特集

# 何を撮り、どう届けるか 動画は市民の道具だ

### 【特集チーム】

村岡 正司、百瀬 真友美

### 【協力】

山上 庄子

(Palabra 株式会社 代表)

※本特集の説明や数値などは、  
すべて2021年5月現在の状況  
です。

コロナ禍で外出控えが続く中、ネット動画の視聴者が増えている。大容量のデータ送受信ができる5Gの普及も追い風だ。動画は、文章を読み解く力に依存せず、より多くの人を対象にできる。バリアフリー化を図れば、なおさらだ。作るための機材やソフトのハードルは格段に下がり、以前よりも簡単に作れるようになっている。市民活動の情報発信ツールとしては、こんな使い方ができそうだ。

どんな事業・活動をしているのか、知ってもらう。  
取り組んでいるテーマ（社会課題など）を知ってもらう。  
事業・活動の担い手の思いや声を伝える。  
取り組みやテーマの記録を残す。  
学習、健康、余暇などの支援ツールとして。  
ボランティア向けの活動説明。

動画を作るとはどういうことか。見てもらうためにどうしているのか。いろいろな実践が、動画活用を模索している人の参考になれば幸いである。

# 動画で自粛生活を支える

## 事業中止でユーチューブにチャレンジ

### 「見る人育て」と両輪で

#### 特定非営利活動法人 茨木高齢者の会



### — 今だからスマホ講座と動画配信を —

大阪府茨木市で、高齢者向けの集いや講演会、街や自然を楽しむウォーキングなどを月5、6回開催してきた「茨木高齢者の会」。2020年度を前に、サロン活動を本格化して高齢者が集う場を増やそうとしていた矢先のコロナ禍だった。

「コロナで市の市民活動補助事業の公募が中止になり、補助金を財源にと計画したサロンは『密』の点からも財源面からもめどが立たない。それまでしていた行事も、ほとんど中止。理事などの運営メンバーは、途方にくれました」と、事務局長の矢頭正明さん。そんな中で開いた20年4月の定例運営会議で「コロナ禍だからこそ」と出てきた案が、スマホ講座と動画配信だった。「大事な情報があっても、『詳しい内容や申し込みはQRコードで』だったりする。スマホを持つてる高齢者は増え

ているけど、難しい。動画は、中止になった行事に代わり、家で楽しめるものを」というわけだ。

しかし、動画配信なんて自分たちができるのか？——60代〜70代の会議参加者12人は、顔を見合わせた。その中で、寺嶋典子さんが「やりましょうか？」と手を挙げた。動画配信の経験はなかったが、メールやLINEのほか、カレンダーや地図、路線案内、写真・動画撮影にスマホを使っていた。「他にいなければ、自分かな」と思ったそうだ。

### — 街あるきと寄席などをアップ

まずはみんなで学ぼうと、以前「タブレットで脳トレ」講座をしてもらった生きがい大阪認定講師の山本直弘さんに頼んで、運営メンバー向けの講習会をしてもらった。

動画編集アプリはスマホでできる「インショット (InShot: InstaShot Inc.)」に決めて、矢頭さんが会のユーチューブアカウントを取りチャンネルを作成した。寺

嶋さんは、講習会だけでなくユーチューブで見つけたインショットの解説動画を数本見て学んだ。

主力のコンテンツは「お家で楽しむ街あるき」と「お家で笑う茨木ネット寄席」だ。

街あるきは、少人数で行事開催したときに寺嶋さんがスマホで撮影。ひとりで出かけて撮ることもある。寄席は、福祉施設などに笑いを届けるボランティア「お笑い福祉士全国の会」の人たちに協力してもらった。落語の練習の場に、矢頭さんが出歩いて撮影している。

動画編集は寺嶋さん。1時間ほどかけて、見どころをつなぎ合わせた。速さを変えたり、効果を入れたりする。それを矢頭さんにLINEで送り、2、3回のやりとりと修正をくりかえして、完成。公開動画の表紙ともいえる「サムネイル」は矢頭さんが作成し、アップも矢頭さんがする。

20年8月に1本目を公開してから、21年3月までの7カ月で31本



スマホ講座

### 矢頭さんのお道具箱

- ✓ iPhone11 のカメラ・マイク—撮影・録音
- ✓ iPhone 用三脚—落語の撮影はカメラの固定が必須
- ✓ パソコン+「パーソナル編集長」(ソースネクスト)—サムネイル作成
- ✓ iPhone11 + InShot—動画編集
- ✓ iPhone11 + LINE—動画PR

### 寺嶋さんのお道具箱

- ✓ iPhone11Pro のカメラ・マイク—撮影・録音
- ✓ iPhone11Pro + InShot—動画編集、BGMも

# チャンネル登録11万人

## 人助けユーチューバー「なきま」さんのリアル

### 路上生活者に弁当を配る 活動を配信

月曜20時。ユーチューブチャン

ネル「デンジャラス赤鬼」のライブ配信が始まる。開始前の「待機」は100人を超え、チャット（左図）には既に多くのコメントが流れている。モデレーター（左下コラム参照）から、チャンネルの基本説明が投稿される。

開始時間になり、コック服のなきまさんが登場。「こんばんは、今日も困っている方にお弁当を届けるために、料理していきま〜す!」。キッチンカーで野菜と肉

を炒め始めたのは、仲間の「こーたん」さんだ。炒め終わると、パックに詰めていく。支援者の「有里



提供：なきまさん

ママ」が差し入れた、いんげんのごまあえも添える。

10食の弁当ができあがると、事前についた50食が積んである車に乗り込み、横浜市の関内駅地下道に向かう。

車中の中継時間は、チャットに反応できる貴重な時間だ。「誕生日です」のコメントに「ハッピーバースデー」を歌うと、チャットでも「おめでとう」が飛びかう。モデレーターのはたらきからもあって、デンジャラス赤鬼のライブ配信はチャットにも温かいやりとりが流れる。時々表示される「スーパーチャット」（左図）で、寄付が重なっていく。

30分ほどで関内駅地下道に着くと、なきまさんが路上生活者に「体調は大丈夫ですか?」「お弁当食べますか?」と声をかけ、お弁当とペットボトルのお茶を渡し始め

た。終わると横浜スタジアムに移動し、同じように配って回る。配る間は、10代を中心に人気の動画プラットフォーム「ティックトック」でもライブ配信している。

「酒を飲んでケガをした」と話し出す男性の前では、しゃがみこんで話を聞いた。サンダルを失くしたらしく、「探して、あったら来週持ってきます」となきまさん。

弁当がもらえると聞き別の場所から来る人もいるので、用意している60食では足りないこともあり、そのときはコンビニや牛丼屋で買いつけている。

**同時視聴1000人、  
1日で3万回視聴**

弁当を配り終える頃には、視聴者は1000人を超えた。ユーチューブ配信は、車での帰宅途中まで続く。なきまさんはそのあと

インスタライブ（写真・動画共有アプリ「インスタグラム」）でできる生放送機能）を始めて、深夜1時頃に終わった。インスタライブでは、ユーチューブ配信中は難しい視聴者とのコミュニケーションを重視している。

ユーチューブのライブ配信動画は、そのまま公開される。筆者が翌日チェックすると、前夜の配信の視聴回数は3万回を超えていた。デンジャラス赤鬼のチャンネル登録者は11・1万人、総視聴回数は1684万回だ。1本で294万回視聴された動画もある。



モデレーター  
スーパーチャット



## 忙しいユーチューバーの毎日

なきまさんは、今春大学を卒業した22歳。就職はせず、この活動に専念している。こーたんさんら協力者を合わせて「大体2.5人分」くらいの人員で回している。

デンジャラス赤鬼では、月曜のほか、週にもう1日程度、路上生活者支援の活動をして、そちらは録画してから編集した動画を金曜にアップする。また、インスタグラムで3日に1回くらい写真や動画をアップして、ティックトック

でも不定期に動画投稿している。ツイッターでは、活動よりもなきまさん個人の思いや日常を中心に、1日数回から10回くらい投稿する。

ユーチューブの投稿を始めたのは、2019年の夏、大学3年の時だ。最初はおもしろそうなことをいろいろ試していたが、あるとき別の動画を見たのをきっかけに、ハンバーガー50個を路上生活者に配って動画にしてみた。「ホームレスの人は怖い」という自分の思い込みが変わったことも伝えて、思いのほか高評価に。その後「人助け」を軸に試行錯誤を経て、昨年の春頃から今のスタイルになった。

弁当を配る日は忙しい。炊飯は他のメンバーがすることが多いが、おかずなどはなきまさんが一人で用意する。昼過ぎから食材の買い出しと下ごしらえを始めて、月曜は50食を事前に作り、配信開始後に調理する10食は下ごしらえまでして取っておく。他の日も、動画編集やSNSへの投稿、ダイレクトメッセージやEメールの対応など、やることがいくらかもある。

## ユーチューブの収益で活動

撮影機材は、音声収録を含めてスマホのみ。今は 아이폰11 Proだが、少し前まで 아이폰7 だった。生配信中の通信回線は、場所によっては固定WiFiを使用するが、携帯電話回線が主で、途切れることもある。

編集ソフトはアドビ「プレミアプロ」。画像加工専門のソフトは使っていない。「商品紹介とかじゃないから、現場感を生リアルに出すには加工しすぎないほうがむしろいいと思います」とのことだ。気になる収益については、どうか。スーパーチャットは月曜のライブ配信と金曜の動画公開時に可能

### ユーチューブの「収益化」

ユーチューブで収益を得るといって、まず思い浮かべるのは広告収益だろう。

広告収益を得るためには「YouTube パートナープログラム」に参加する必要があるが、参加条件には「チャンネル登録者が1000人以上」「直近の12カ月で再生時間が4000時間以上」などがある。この条件を満たすのはそう簡単ではなく、「ユーチューブでもやって財源の足しに」は現実的ではなさそうだ。

デンジャラス赤鬼のライブ配信で目にするスーパーチャット（略称スパチャ）は、ライブ配信中に、視聴者が配信者にお金を送って応援できる「投げ銭」機能。これも、YouTube パートナープログラムに参加している配信者のみが利用できる。誰かがスーパーチャットを送ったあと、その行為に対して「ナイススーパーチャット」の意味で「ナイスパ」とコメントする文化がある。

### チャットのかなめ、モデレーター

ユーチューブのライブ配信で、視聴者はチャットにコメントを投稿できる。モデレーターは、チャットに投稿された不適切なコメントを削除するといった権限があり、チャットで他の視聴者と対話したり、説明を加えたりする役割も果たすことが多い。配信者がライブ中にコメント管理を同時進行するのは極めて難しいので、チャットを安心できる場にするためにモデレーターの存在は重要。

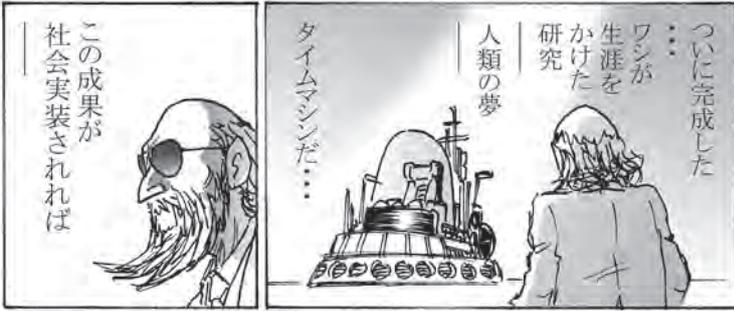
デンジャラス赤鬼のモデレーターは現在5人。個別のコメント対応のほか、チャンネルの基本説明やなきまさんたちの活動説明、今日のメニュー、支援の呼びかけなどが適宜投稿される。常連視聴者のコメントが盛り上がり、初めて見に来た視聴者に分かりにくそうになると、すかさず解説が入る。

モデレーターの設定はなきまさんがするが、指名というよりは立候補に近い形で決まっている。

Vol. 118

# 「社会実装」って？

## うおろ君の 気にな〜る セミナー



「社会実装」は、科学技術振興機構の「社会技術」という概念から生まれた言葉である。社会技術は「自然科学と人文・社会科学の複数領域の知見を統合して新たな社会システムを構築していくための技術」(注)であり、社会の諸問題の解決を目指す技術のことである。社会実装とは、得られた研究成果を社会問題解決のために応用、展開するというのが元々の意味である。

近年、社会起業家やNPO関係者も、新規事業に取り組み際に、準備期間を経たあと商品やサービスを提供するに至る段階を指して「実装」ということがある。複雑化・複合化する社会課題に対して、解決方法や専門性を、均一化・標準化した合理的な技術としてではなく、実践の知(暗黙知)として、課題を抱える当事者や状況などとの相互のやり取りから生み出すものとして捉える傾向によるもので、社会実装の意味を踏襲したうえで単に「実装」と表現していると思われる。

社会的課題の解決方法を生み出すところに専門性や価値を見いだすだけでなく、課題設定のプロセスを当事者と共有し、事業を批判的に振り返り、より効果的な解決方法へと事業を昇華させていく省察的な実践スタイルを、社会実装・実装という言葉で表現しているといえよう。

編集委員 竹内友章

(注) 科学技術庁が設置した「社会技術の研究開発の進め方に関する研究会」の提言(2000年)による定義。 <https://www.jst.go.jp/rstex/aboutus/index.html> 参照

ウオロ2年分(12冊)を  
挟み込めるバインダー  
(1冊500円+送料350円)です。  
お問い合わせはウオロ編集部/office@osakavol.orgまで

# 「からしだね書店&カフェ・トライアングル」

**米** 5mm、ゴマ3mm、からし種0.5mm……  
 どんな種より小さいのに、地に蒔くととも大きな樹になる。入り口には、新約聖書に由来する「からし種」の解説があった。

京都市東部、住宅地に古刹が点在する山科区勤修寺地域。3月2日、精神障害者就労支援事業所「からしだねワークス」を運営母体にして、このブックカフェは開店した。中京区で長年営業していたキリスト教専門書店を引き継ぎ、コロナ禍で長期休業中のカフェと共存した書店にリニューアル。各種イベントに活用できる地下ホールを併設し、スタッフとして働く精神障害者が社会とつながり、交流できる地域の拠点をめざす。

運営は社会福祉法人ミッションからしだね。現理事長の坂岡隆司さんらクリスチャン有志の手で、2006年に設立した。約20年間高齢者施設で勤務していた坂岡さんは、精神障害者の社会適応訓練事業の受け入れをきっかけに、精神障害者が社会で生きていくことの困難さを目の当たりにした。そして、当時はまだ社会的偏見の根強かった精神障害者の福祉施設を自分らで開設する決意をしたのだった。

「カフェは対話の場、そして発信の場としていきたい。書店は活字文化を大事に考えていきたい。私たち職員やお客さん、そこに通う障害者たちも、からし種のように小さな小さな存在です。そんな声なき声をナマの人間同士の対話でわかち合い、つながりを生み出せる市民活動の拠点になればと思います」。坂岡さんはそう話す。

編集委員 村岡正司

**からしだね書店&カフェ・トライアングル**  
 京都市山科区観修寺東出町75 からしだね館1階  
 電話 075-574-1001  
 営業時間 11:00~17:00 日曜・年末年始休み  
<https://karashidane.or.jp/>



右／カフェスペースを使ったモンゴル音楽のイベント（提供：坂岡隆司）  
 左／書店スペース



**社会はこうやって変える!**  
 コミュニティ・オーガナイズング入門

マシュー・ボルトン 著  
 藤井敦史・大川恵子・坂無淳・走井洋一・松井真理子 訳  
 法律文化社、2020年9月  
 2640円（税込）

本書は、市民の力（パワー）を紡ぎ、組織を作り、アクションを起こして社会を変える一つの手法である、コミュニティ・オーガナイズング（以下、CO）の入門書である。COは、組織的な権威や多額の資金的なパワーを持たない人々が権利や社会資源を獲得するための運動論と言える。

独特な表現である「パワー」「自己利益」を読み解くことが本書のポイントである。

「もし変化を望むならば、パワーが必要だ。共通の利益をめぐる、他の人々との関係を通してパワーを構築する

のだ。（中略）意思決定者の反応を引き出すアクションを起こして、彼らとの関係を構築する必要がある」とある。パワーという言葉は、権力による抑圧や支配がイメージされ、市民活動からは避けられる鍵概念であるが、筆者は中立的なものだとして「正義は、それを実現するパワーがある時だけ手にすることができる」という原則を提示する。

また、「自己利益にしっかりとつながっている課題こそが行動を起こす」とあるように、人々は理念ではなく、自己利益のために行動することを前提としたCO実践を提案す

る。美談ではなく、具体的な成果にこだわることへの指摘と言える。

本書では、さまざまな問題への関わりを著者の失敗談も含む豊富なエピソードをもとに、CO実践として価値を共有していない人や組織との協働や連帯のための手法が多様な側面から提示される。COは、社会問題の解決はもちろん、日々の暮らしを豊かにしていくことに寄与することにもつながることを紹介している。

編集委員 竹内 友章

沖 縄県民 スカフ戦へリ 県民ニ  
対シ後世特別ノ御高配ヲ賜  
ランコトナリ

映画の中でも紹介されるこの言葉は、沖縄戦で日本軍の敗戦が迫る中、島田勲と「肝胆相照らす」仲といわれた大田寛海軍中将が、中央に送った電文の結びの部分だ。県民の真の姿を伝えようとしたこの電文が戦後公表されると、多くの沖縄の人が胸を熱くした。

大阪府内政部長だった島田勲が、沖縄県知事として赴任したのは、1945年1月のことだ。前年の大空襲で那覇は焼け野原になっていたから、命がけだったことが想像できる。すぐに手掛けた仕事は、県民の食糧確保や疎開。そして、方言や歌舞音曲の禁止を撤廃し、沖縄の文化を解放した。当時は方言を話せばスパイと疑われ、軍に殺害されることもあったから、県

民にとって自分たちの言葉で話して良いという意味は大きい。沖縄出身の私にとっても、戦後76年目にして初めて知る沖縄戦の一面。島田の人柄に興味を湧いた。

島田赴任の前年11月、沖縄戦の指揮官で、陸軍第32軍司令官の牛島満は、「軍官民共生共死の一体化」を命じた。島田たち行政官は絶対権力をもつ軍の命令下、60万の県民を指導する立場にあった。鉄血勤皇隊に代表される少年兵の動員を可能にしたのは、軍と県知事が交わした覚書だという。

県知事として県民の生活のためにやるべき仕事と、県民も戦闘要員に動員せよと迫る軍の要求の板挟みになる島田。県民の死者が増える中、毅然と軍に抗うようになる。そして「県庁を解散」した。これからの復興のために働きなさいと、部下たちに、未来へ向けた

言葉を送ったのだ。「生きて虜囚の辱めを受けず」と洗脳された時代、「生きる」という島田の言葉によって自決を思いとどまり、沖縄の復興に力を注いだ人たちがいる。

常に正しく判断し、民主的に決断を下す。コロナ禍の現代の行政官にだってこうした能力が求められているわけだ。過酷な沖縄戦の最後の知事だった島田。大らかな人物像が浮かんできた。



©2021 映画『生きる 島田勲』製作委員会



監督：佐古忠彦  
プロデューサー：藤井和史 刀根鉄太  
撮影：福田安美  
語り：山根基世、津嘉山正種、佐々木蔵之介  
主題歌：小椋佳  
配給：アーク・フィルムズ  
2021年 | 日本 | 118分

今月の作品 「生きる 島田勲」 — 戦中最後の沖縄県知事 —

●今月の館主

おおがねく よしみ  
大兼久 由美

沖縄県生まれ。柴田昌平監督作品のプロデュース、配給を行う。長編記録映画「ひめゆり」(2007) は毎年上映を続け今年 は 15 年目になる。新作「陶王子 2 年目の旅」が公開中。お問い合わせ：042-497-6975



イラスト：杉浦 健



ルポ 入管 — 絶望の外国人収容施設

平野 雄吾 著  
ちくま新書、2020年10月  
1034円 (税込)

本書の帯に「密室で繰り返される暴行、監禁、医療放置 巨大化する国家組織の知られざる実態」とある。「密室」とは、日本での在留資格がない外国人を収容する全国 17 カ所の入国管理施設が所管し、日本の法の下に運営されているはずの施設がいかにも「無法状態」にあるか、詳細に暴いたのが本書である。

入管施設に収容されるのは主に不法在留や不法入国など、在留資格がないため強制退去対象となった人々たちだ。だが「不法」の実態はさまざま。難民申請中の人もいれば、長く日本の産業を支えてきた

人もいる。そもそも施設は刑務所ではない。本来、懲罰になじまず、長期間の拘束を前提としない制度・施設であるはずだ。仮放免制度もある。なのになぜ、不自然な死因の死者が出たり、処遇に抗議するハンガーストライキをしたりするかの。

著者が最も問題視するのが、第三者の目が届かないまま入管庁が全てを判断する、大き過ぎる「裁量」だ。裁判も裁量を追認するケースがほとんどで、日本で生まれ、日本しか知らない子を親もろとも強制送還することも、それが嫌なら親子を引き離すことも躊躇しない。「制圧」とい

う暴力、病人を放置する非情(判断放棄)、強制送還後に母国で待ち受ける事態への人道感覚の欠如。読むほどに日本人であるのがつらくなる。

本書掲載の統計で、先進7カ国の難民認定率(2018年)はトップのカナダ 56.42% (16,875/29,909人) に対し、日本は最低の 0.25% (42/16,596人) に過ぎない。折しも国会では入管法改訂(悪)案が審議され、一方で入管施設に収容されていたスリランカ人女性の死亡原因が追及されている。このままで良いはずはない。恥を知る日本人なら、必読の一冊だ。

編集委員 増田 宏幸